禅の友

Zen no Tomo

3

March 2024

ご本山だより
大本山永平寺【観音懺法】

毎年三月二十四日には「観音懺法」という法要が行われます。観世音菩薩の広大な霊感を請い、懺悔をするためのものです。懺悔とは自らの犯した過ちを反省し、悔い改めることです。

その行いが悪いとわかっていても「一回くらいだいじょうぶだろう」とついつい行ってしまうこともあります。気付かないうちに他人を傷つけることもあります。気付いているもの、気付いていないもの、双方合わせれば途方もないほどの過ちを犯しながら私たちは生きています。それらを深く反省し、観世音菩薩の無量広大の慈悲のお力をかりて、正しく道を歩めますようにと心より願うのがこの法要の意味です。

この法要は、中国天台の祖である智顗が著した『請観音経疏』を元に、様々な僧侶が幾度かの更新を行い、今からおよそ千年前に確立されました。一時間半ちかくの時間をかけ、特別な形式や作法に則って厳密に修されます。

さて、今年永平寺では二月十七日より三月の終わりまでの間に、およそ五十人の修行僧が上山する予定です。その多くは数週間前までは大学生で、自由気ままに学生生活を送っていた者たちばかりです。その現代の若者が、千年前から続く法要に参加するのですから、驚きや戸惑いが相当なものであることは想像に難くないでしょう。したことのない体の動きや聞いたことのないお経の旋律。ただ必死についていくことしかできません。しかし、二年目、三年目の修行僧たちは平然と行います。力みもなく法要の流れに身を任せているかのようにも見えます。

その差はどこから生まれるのでしょう。それは日常生活によって生まれるのです。永平寺の正法に則った生活を続ける中で、自然と身心が調い、所作が身に付き、僧侶としての自覚も芽生えてくるのです。観世音菩薩の慈悲心はこの生活そのものなのかもしれません。

大本山永平寺
福井県吉田郡
☎〇七七六・六三・三一〇二

ご本山だより
大本山總持寺

【縱使、難値難遇の事有るとも、必ず和合和睦の思いを生ずべし】
『洞谷記』

大本山總持寺
神奈川県横浜市
☎〇四五・五八一・六〇二一

三月は花見月と呼ばれるほど、梅・桃・桜をはじめ、たくさんの草花が咲き誇る季節です。

またこの時期は、三寒四温を実感する気温差のある季節でもあるので草花もその気候によって開花も違ってきます。

昨年は温暖化を超え、地球沸騰時代と表現されたことを思うと全てが早まってきているのかもしれません。

現在、總持寺では新しい修行僧が上山してきています。これまで学生や社会人として様々な生活スタイルを過ごしてきた彼らではありますが、ひとたび本山に入ったなら全く今までとは違った衣食住となります。僧堂に起居して和合の精神で一心に修行に励むのです。それ故、個人的な勝手な言動は慎まなければなりません。これを「大衆一如」と言います。

總持寺開祖・瑩山禅師さまの教えの中には、仏道修行者の歩むべき道は山のようで、登ってみると益益高く、仏祖のお徳は接してみれば益益深いものであり、終着点のない仏道修行への厳しさをお示しされていることばがあります。

いよいよ四月一日から三週間にわたって、總持寺開祖・瑩山禅師七百回大遠忌法要が厳修されます。全国から選出された、禅師さまに代わって法要を勤めてくださる焼香師さま、檀信徒の皆さまが順次上山され、厳粛な法要が執り行われる予定です。五十年に一度の難値難遇の法要ではありますが、皆が和合し協力し合い、また睦み合う思いをそれぞれが起こし、この法要が成就することを願ってやみません。

曹洞 俳壇

選・坊城 俊樹

晦日蕎麦食らひ浮世の裏表

兵庫県　中水 大介

評　ことに大晦日に食べると健康や運勢に良いとされる蕎麦。一年の回想をしみじみと味わいながら。たしかに浮世とは裏と表があるからその回想も滋味あるものとなる。しかし日本人とは本当に思慮深くてしみじみとした味わいのある民族だと思う。

海峡の天使のはしご冬来たり

山口県　稲村 みどり

評　雲の間から下界に射し込む一条の日の光を「天使のはしご」と言うらしい。確かに天使が下りてくるような崇高な光に見える。真冬の海峡はことに荒々しい潮流があったりしてその荘厳の景色にこの光はすばらしい物語のようにも思える。

◆冬の夜ブラックフライデーって何　静岡県　石濵 徹

◆朝礼の校歌の中へ木の葉散る　千葉県　甲斐 勇

◆妣泣くも叔父御は征きぬ開戦日　神奈川県　堀田 耕一

◆刈田風石地蔵だけぢつと佇つ　東京都　松本 キヌヱ

◆サックスのソロは少女やクリスマス　長野県　森山 昌子

◆ん・ん・ん・んと聞き入る山主秋の月　静岡県　末光 愛正

◆米寿はや乙女ここちで聖樹買ふ　宮城県　金升 富美子

◆鈴の緒の褪せて古刹の冬ざるる　岐阜県　大下 雅子

◆雌鶏の良き面構へ冬に入る　東京都　須見 祥子

◆生涯にひとりの妻と年用意　愛媛県　井上 征郎

選者吟

かくれんぼ横丁に冬が隠れん坊

俊 樹

作句小見　「かくれんぼ横丁」とは東京の新宿に存在する。飲み屋が続く裏道はなかなか味わいがある。芸子さんとすれ違うこともあるが、そこで冬と出逢ってしまうのはさぞかし寒々しい。せめて昼酒でも一杯ひっかけてどこかにしけ込もうか。

曹洞 歌壇

選・長澤 ちづ

身じまいを共にと切りし柘植（つげ）、木犀惜しみ清めん切株七つ

群馬県　松本 さえ子

評　「身じまい」は、下句で柘植や木犀の木が切り株になっていることから「身終い」の意味で使われているのだろう。「終活」などの言葉を避けて、自身の最期への心構えを愛した樹木に託して詠われていて背筋を正される気がした。

小春日和くもりガラスを拭ふたび家族の思ひ出ありありと見ゆ

宮城県　阿部 澄江

評　家族が多く賑やかだったころを映していた窓ガラス、小春日和のある日、窓拭きをしながら昔をなつかしむ作者である。年末年始には、子らがその家族と共にも帰省するのだろうか。

◆北国の女は強い雪の朝スノウダンプをがっしり掴む
秋田県　小松 紀子

◆川端の草花多き野に坐して心弾めば草笛を吹く
石川県　千間 宏治

◆崖の上の小径に咲ける野の花と共にしばらく潮騒を聞く
埼玉県　白藤 巳玲

◆暁鐘（さとうしょう）の南の空に月と星釈迦も見し星明けの明星
静岡県　末光 愛正

◆赤い実は幸せ呼ぶとわが植えし千両・万両たわわ南天
静岡県　杉原 民子

◆ブロッコリー購ひてのち生産者見れば知人の名前見つける
静岡県　小川 健治

◆海遠く平素気づかぬ潮騒の音聞こえくる更けし冬の夜
鳥取県　徳本 義則

◆欠礼の知らせが届く年の瀬に街路樹落葉散りしきるなり
山口県　橋本 美知子

◆島よりのフェリーボートが入港す車あまた積み正月四日
広島県　徳永 進一郎

◆肥料一袋老いの付け買い出来ぬとぞ子の名を添えて伝票渡す
岩手県　宍戸 さとる

選者詠

思い出の景色とスマホに教えらる木末にまるき春の宿り木

ちづ

作歌小見　新年早々の能登半島地震、被災された皆さまに心からお見舞い申し上げます。元の生活に一日も早く戻れますようにと願わずには居られません。明日の平穏な日が保障されているわけではないことを改めて粛然とした心持ちになりました。

ハガキ１通に３句（３首）以内を俳壇、歌壇別々に住所（都道府県名から）・氏名を楷書ではっきりと記入し送付先までお送りください。